

七 転 八 起

第4号
2020年7月6日発行

梅雨の蒸し暑さが続く中、7月に入りました。教室内のエアコンも稼働し、快適な学習環境が保たれていると言いたところですが、現在のコロナ禍の状況により、教室の窓やドアを開けて、換気に努めながら、授業がすすめられています。

コロナウイルス感染防止対策により遅れた学校再開も、1ヶ月が過ぎました。ここ福島県では落ち着きをみせているものの、首都圏を中心に、いまだ終息には至っておりません。皆さんもできる限り、首都圏への移動は極力さけるようにしましょう。

さて、6月からの学校再開により、大切な中間考査が7月へとスライドされました。例年ですと7月20日頃から夏休みに入りますが、今年は、テストも含め、7月いっぱい授業となります。休校期間中の遅れを取り戻すためのものですので、暑さとの戦いにもなると思いますが、夏休みまで、あと1ヶ月頑張りましょう。そして、テストへの準備も念入りにしてください。



保健室の利用について



梅雨の時期のせいか、体調不良を訴え、保健室を利用する生徒たちの数が増えています。保健室の利用について、2学年の生徒の皆さんには以下のことを守ってもらいたいと思います。

☆保健室を利用する際には教科担当、担任もしくは副担任にしっかりと連絡をすること

独断で保健室に行き、担当教員がそれを把握していなかったという事態を防ぐためにも、これについては遵守するようにしてください。また、保健室は健康的に学校生活をおくるための場所であることを忘れず、利用の際はマナーを守ってください。コロナウイルス感染防止対策の観点からも、不必要な利用は絶対にさけてください。



今後の予定

日 付	予 定
7月11日(土)	土曜授業(木曜時間割) 6校時:生徒総会
18日(土)	土曜授業(金曜時間割)
20日(月)	前期中間考査(～22日(水))、修学旅行関係書類提出締切日
31日(金)	全校集会①
8月3日(月)	夏季休業(～8月14日(金)まで)、夏期講習(～8月7日(金)まで)
17日(月)	全校集会②、一斉指導、登校指導
22日(土)	基礎力診断テスト(2回目/全3回)



保護者の皆様へ

コロナ禍の影響を受け、6月からスタートした2学年の学校生活も早1ヶ月が過ぎました。長期にわたる休校により、体調面や精神面等での心配もありましたが、ここ1ヶ月の生徒たちの元気に登校する姿を見て、私たち教員も胸をなでおろしているところです。

生徒たちの休校中ならびに現在の様子については、個別面談を実施してある程度把握させていただいておりますが、何分すぐに終息するという状況でありませので、今後も感染対策を取りながら、生徒一人ひとりの指導にあたってまいります。

また、6月22日付、配布文書でご案内の通り、本校において大きな学校行事の一つであります海外修学旅行を新型コロナウイルスの世界規模での拡散により、中止という判断をさせていただきました。

しかしながら、修学旅行は生徒たちにとっても大切な校外研修の場であり、高校生活の思い出の1ページになるものです。そこで、代替案として、国内修学旅行(関西方面)を検討しています。

コロナウイルスの完全終息が見えない中ですので、保護者の皆様にはご心配をおかけいたしますが、今後ともご協力くださいますようお願い申し上げます。

～連絡～

修学旅行関係書類の提出を期日までにお願いいたします。

提出物：誓約書・承諾書・緊急連絡先、修学旅行費納入確約書、アレルギー調査
期 日：7月20日(月)

最近、さまざまな媒体で「コロナ禍」という活字を目にします。皆さんは「禍」という漢字は読めますか。恥ずかし話ですが、私は、「わざわざ」としか読めませんでした。あの「禍（わざわざ）を転じて福と為す」の「わざわざ」です。しかし、それについて、興味を持って調べてみると、「コロナ禍（か）」と読むのだと知ることができました。そして、私の頭の中には「コロナ禍」がインプットされました。

その「コロナ禍」により、本校では長期にわたる休校措置がとられ、授業を再開できたのは、それから３か月後のことでした。

待ちに待った私の最初の授業は「カラーコーディネーター入門」でした。３か月ぶりの授業に胸躍らせながら、軽い足取りで教室へと向かいました。私にとっては、久しぶりの授業であり、生徒たちにとっては、はじめて受ける「カラーコーディネーター入門」の授業でしたので、程よい緊張感の中、授業の方は、思った以上に淡々と進んでいきました。

そして、この日の授業のポイントは、「人間は視覚から８０％以上の情報を得ている」と「人間は７５０万色～１０００万色もの色を見分けられる」という２つでした。

しかし、後者の７５０万色～１０００万色にはずぶん幅があります。当然、個人差はありますが、それ以上に暮らす地域や人種によっても、見分けられる色の数が変わってきます。

では、私たち日本人はというと、実は諸外国の方よりもたくさん色を見分けられるそうです。

授業の中で私が生徒たちに投げかけた質問は、「虹は何色ですか」という質問です。これに対して、生徒たち全員が、「７色」と答えてくれました。確かに、虹の色は、赤・橙（だいだい）・黄・緑・青・藍・紫の７色です。これは日本では常識とされています。

しかし、他国ではこれが常識ではありません。アメリカやイギリスでは一般的に虹は６色と言われており、青色と藍色を区別しません。何より藍色の概念がありません。フランスやドイツではさらに橙色も赤色や黄色区別しないため、虹は５色だと疑いません。

虹は、大気中に浮かんでいる微小な水滴の中で太陽の光が屈折することによって浮かび上がります。水滴がプリズムの役目をするため、光が赤から紫の色の帯に見え、屈折率の違いから、虹は、外側から赤・橙・黄・緑・青・藍・紫の順番になっているように私たちには見えます。

しかし、虹は連続して変化した色の帯ですから、はっきりとした色の境目があるわけではありません。これを何色ととらえるのかは、その国の文化によっても異なります。

もともと四季のある国に暮らす日本人の色彩感覚はとても奥深く、たとえば平安時代には十二単衣のように色を重ねる色彩美がありました。

江戸時代の後期には、町人や商人の生活が豊かになり、着る物の素材や色に変化があらわれ、庶民たちは、「良い物を着たい」とか「きれいな色の物を着たい」と思うようになりま

した。

そこで、幕府の偉い人たちは「庶民に贅沢をさせず、質素な生活をさせるにはどうしたらよいのか」と考えました。そして、「貯めたお金は幕府が潤うために使かわせる」という目的で贅沢禁止法、いわゆる奢侈禁止令（しゃしきんしれい）を発令しました。

こうして、幕府は庶民の「着物の生地・色・柄」にまでも細かく制約を設け、当時の庶民が身につけられる着物を、素材は「麻」もしくは「綿」、色は「茶色」か「鼠色」か「藍色」のみと限定してしまいました。

しかし、人々の中には他の人とは違う色の着物が着たいという欲求がありました。それを叶えるべく、職人たちが試行錯誤しながら色の中に微妙な色調を工夫して反物を染め上げたことによって生まれたのが「四十八茶百鼠（しじゅうはっちゃひゃくねずみ）」という色合いです。特に茶系統と鼠系統の多彩な色合いとその都度つけられる新しい「色名」が次々と生まれました。決して華やかではありませんが、「粋」で洗練された日本の色彩文化の一つとなりました。

「四十八茶百鼠」の四十八や百は色数ではなく、多色という意味で使われました。茶系統も「団十郎茶」「路考茶」など７０以上の茶色があり、鼠系統も「梅鼠」「藤鼠」など、実際には、１００以上の色名があるそうですが、言葉のゴロが良いため「四十八茶百鼠」と言われたという説があります。その微妙な色彩の違いを当時の人々は見極め、生活の中に取り込んでいたことにはとても驚きます。

このように、昔から日本人の色に対する感性はとても繊細で、見分ける能力にも長けていて、豊かな色彩感覚を育んできたことがわかります。実はそれが、現代の私たちにも脈々と受け継がれているのです。

これがこの日の授業の内容でした。しかし、テキストには、「６色や５色の虹」や「四十八茶百鼠」の話は書いてありません。これらが、私の教材研究という名のインプット（情報や知識を新たに吸収する）の成果です。それを授業でアウトプット（知識や情報を外に出すこと）しただけです。

おそらく皆さんも休校期間中は、学校が恋しくなったのではないのでしょうか。私たち教員も授業の再開を心待ちにしていました。これまでにない長い休校期間になりましたが、その分、私はたくさんのインプットができました。私たちがインプットする理由は、授業というアウトプットの間があるからです。ですから、授業を受ける皆さんの存在がなければ、私たちのインプットは意味を成しません。

さらに、コロナ禍の状況に陥ったからこそ、私は生徒たちに「今日も無事に登校してきてくれて、ありがとう」という感謝の気持ちを持つことができるようになりましたし、日々繰り返される授業は、当たり前ではないことにあらためて気づかされました。

さて、今日も世界を変えるために授業するぞ！（私）

よし、今日も世界を変えるために勉強するぞ！（あな）

それぞれのインプットが、きっと世界を変える力になるはずです。